

大学生の進路(キャリア)をめぐる心理教育的支援に関する基礎的研究

Psycho-Educational Support for College Students' Career Development

喜田 裕子・高木 茂子

KIDA Yuko & TAKAGI Shigeko

〈はじめに〉

本学の状況

本学における平成12年度カウンセリング室利用状況を振り返ると、「進路」に関する相談が、「心の健康・精神衛生」に次いで第2位となっている(表1)。しかも、「進路」の相談に関しては、4年生が全体の約9割と圧倒的に多く、かつ年度末の3月にいたっても4年生の相談件数はまったく減少しなかった。内容については以下に詳しく検討するが、全体として、一般に想像されるような「就職先が決まらない」悩みよりもむしろ、「決まったけれどこれでよかったのか」という内容が目立った。

このことから、進路選択に関しては、実際の就職指導に加え、心理・教育的な側面からの援助を必要としている学生の存在が指摘できる。もちろんカウンセリング室に来談する学生の特徴を、本学の全体的傾向として類推することは適切ではない。しかし、援助を必要とする学生が存在する以上、そのニーズにいかに対応していくかということは、本学における学生相談の課題であるといえよう。さらに、たとえ表立っては援助を求めない学生であっても、潜在的にはどのような心理教育的指導・援助が求められているのかを把握し、積極的に提供していくことが、学生相談の重要な任務のひとつであると考えられる。

他大学の取り組み

大学教育で進路指導が重視されるのは、全国的な傾向とも言える。たとえば、朝日新聞(平成13年6月3日付け)には、1年生のうちから進路指導のためのガイダンスや講座を提供している大学として、帝京大学、専修大学、立教大学などが、また、1年生の時点で適性検査等を活用した学業・生活・進路指導を展開している大学として、松山大学、聖学院大学などが紹介されている。これらの実践は、就職の実際の指導以前の課題として、モラトリアムの持つ弊害的側面が叫ばれる今日の大学において、学生の進路意識そのものの育成を重視していると言えよう。

また、大正大学では、学生部が変わる組織「学生総合開発センター」を設置して、多彩なメニュー取り揃えた「自己開発プログラム」を提供している(澤田・阿部、2000)。「学生総合開発センター」は一般の学生課や就職課の機能に加え、キャリア形成・社会人としての実践能力の育成・習得をサポートする機能を拡充させたものであり、キャンパスの学生ホールに設置されたオープンスペースとなっている。「自己開発プログラム」は、進路を模索する「自己養成プログラム」と、就職に直結する「進路開発プログラム」で構成される。「自己養成プログラム」では、ボランティア活動やスペシャリストセミナー、インターンシッププログラムを通して、実社会に根差したかたちでの自己発見・自己理解を促進し、進路意識を高める。その上で、社会常識養成講座、実務養成講座において職業的能力のスキルアップを図るといふ。「進路開発プログラム」では就職に直結する

表1 平成12年度カウンセリング室利用状況

平成12年4月1日～平成13年3月31日

	利用のべ人数	内 訳											
		学業	人生・思想	性格	精神衛生 心の健康	対人関係	進路	家庭	生活	サークル	コンシェル ジョン	ヴァイ スパー ズ	その他
4月	17 4				6	1	6		1		3		3 1
5月	19 7				9 2	1	4	1			5		4
6月	14 1	2			9		3				1		
7月	34 1	1		1	15	4	6	2					5
8月	4				1	3			1				
9月	21				10	6	2						3
10月	28 1				18		7				1		3
11月	25 4				16		6	2			4		1
12月	14 5	1			7		3				3		3 2
1月	15 1				5		7				2 1		1
2月	14 3				8		6				2		1
3月	10				2		6						2
計	215 27	4		1	106 2	15	56	5	1 1		2 20		25 4
合計	242	4		1	108	15	56	5	2		22		29
%		1.7		0.4	44.6	6.2	23.1	2.1	0.8		9.1		12.0

上段 在学生
下段 その他

ような、ガイダンスやビジネス講座、採用試験対策講座が提供される。以上のプログラムは、近年では本学をはじめどの大学でも取り組み始めている内容ではあるが、それをより組織化・体系化して全学生を包括的に取り込んでいる点や、サポート機能をオープンスペースの空間に集約し、学生の居場所機能や情報交換の場を同時提供することにより進路意識の自然な醸成が期待される点に注目しておきたい。

本研究の目的

以上の問題意識に基づき、本研究では、進路（キャリア）をめぐる心理教育的援助のありかたについて、事例研究及び調査研究を通して検討することを目的とする。

〈研究1〉

【目的】

臨床的観点からの検討を目的に、本学カウンセリング室で受け付けた進路に関する相談事例を中心に、4例取り上げて概観する。論点を絞り込むために、1回ないしは数回の面接で一区切りがついた事例に限定して論述する。尚、当事者である各学生には掲載の許可を得てあるが、プライバシー保護の観点から、記述に若干の配慮を加えることとする。

【事例A】

4年生女子。平成〇年4月下旬に来談。

今日これから就職の面接があるが、実はそれ以前に、自分が何をしたいのか何も考えずに受けた（傍線は筆

者) 会社から合格通知がきてしまった。今後、本命の会社受験を控えて、誓約書の提出延期を申し出たがかわず、結局自分の可能性を試してみたいと思い、その会社は断った。今日これから行く会社で、現在の就職活動状況について質問された場合、そのことを正直に言っているものかどうか、しどろもどろになるのではないかと不安である、と語った。Th.(セラピスト=心理面接者・治療者の略。以下同様)と話し合っていくうちに、就職に際して自分は何を本命とするのかの基準自体がCl.(クライアント=来談者の略。以下同様)自身の中であいまいなことが不安の一原因であることが明らかになった。さらにTh.の質問に促されて自分を語ることにより、その基準が少しずつCl.自身の中で明確になっていったように見受けられた。その過程で、「就職先を1つに決めてしまうことへの内面的な迷い・抵抗感」といった青年期特有の心理的課題が語られたが、Cl.の自我機能が高水準で機能しており、当面治療的介入は不必要であると判断されたため、支持的に介入するとどめたところ、「話してみて少し自信ができました」と退室した。

【事例B】

4年生女子。平成〇年7月来談。

主訴は、自分が何をしたいのかわからないということであった。自分を殺してでも親の期待にこたえようとしてきた成育歴がとつとつと話された。詳しい内容の記述はここでは控えるが、Th.はその話し方から、自己を相対化しつつもなんとか自己確立していきたくと模索する、Cl.の潜在的な発達希求のたしかな手ごたえを感じ取った。そこでTh.は、親の期待の高さは現実としてあったかもしれないがその一方で、それを先回りして読み取り、いい子を演じる役割をCl.自身が好んで選び取ってきたこと、そしてそのことこそが、今Cl.が苦しんでいることなのだ指摘した。つまり問題は、親とCl.との葛藤でなく、Cl.自身の中にある、親の期待に答えたい願望と、期待から開放されて自分自身の人生を生きたい願望との葛藤であると明確化し、Cl.がより安心感をもって自分を見つめていけるよう援助した。その後、数回の面接を経て、Cl.は進路に関する希望を語りはじめ、目標が定まったところで終結した。

【事例C】

4年生男子。平成〇年12月来談。

就職の内定をもらったが、転職のある会社で業務内容も厳しいと聞くため、自分に勤まるか不安である、と語る。話を聞いていくうちに、その不安の背景として、「長男なので、親元にいなければならないのではないかというプレッシャーもあったが、その反面、それに反発して飛び出したい気持ちがあった」と述べた。思春期的自立と依存をめぐる葛藤の妥協形成として親元に本社がありながらかつ転職のある会社を知らず知らず選んでしまっていたことが推測されたため、その主旨に沿ってTh.が共感的に介入していったところ、Cl.はほっとした表情でそれを認めた。内面をありのまま語り体験することができたことにより本人は安心感が高まったように見受けられた。Cl.の口から、「ここまでできたのでやるだけやってみます。」と決意が語られた。

【事例D】

4年生男子。〇年2月来談。

ある業種にこだわって、就職活動を展開してきたが、内定が得られない。Th.がその業種にこだわってきた背景をたずねると、Cl.は「ただなんとなく自分はこれ、と決め付けていたような気がする。」と語った。それについてさらに話しあった結果、Cl.は特定の業種でなくても、自分の能力と個性を発揮しうるのでないかと発想を転換し、そのことについてさらに自己検討を続けた。数回の面接を経て、Cl.は内定を得た。その際、「決め付けずにもっと早い段階からいろいろな可能性を探ればよかった」と悔やむ姿が印象に残った。

【考察】

ここに挙げた4事例はすべて、心理的にはごく健康な一般的な学生といえる。カウンセリングへの来談が、病理とは関係なく、むしろ自己開発や他者理解といった動機で気軽に利用されやすいことが、学生相談を含む教育臨床の構造的利点と言えるかもしれない。それにもかかわらず、心理学的観点からは、思春期・青年期は

無事に生き延びるにはまことに困難な、課題の多い時期でもある。そこで、カウンセリング室では常に青年期の心理発達のサポートを視野に入れつつ相談にあたる事が求められる。

たとえばカウンセリングに限らず一般に、相談場面ではしばしば「どうしたらいいですか」といった質問が見受けられる。これに対して、現実的・具体的な助言指導を行った方が効果的である場合とそうでない場合があり、専門的な心理学的判断が必要とされることもある。カウンセリングでは、「どうしたらいいですか」といった質問に安易に答えてしまうことを避け、その課題にとも向き合うなかで、未解決な発達を促すことを主眼とする。事例Aでは具体的に就職面接でどうすべきかと質問されたが、それに対して即座に常識的見解から答えるのではなく、いったん回答を保留して対話を続けた結果、質問の背景にある不安を把握することができ、その結果、就職面接に対する不安も軽減された。

事例BとCでは、思春期に未解決のまま先延ばしにしてあった親からの心理的離乳をめぐる危機が、進路選択にあたって再燃したといえる。危機とは、もう一皮脱皮するための好機でもある。カウンセリングでは、自分のなかにあるさまざまな感情を吟味することを通して発達危機が乗り越えられ、来談者自身が現実的な問題解決に取り組めるようにも援助する。すなわち、進路選択の話題を通して、同時に、学生が大人へと成長するための心理的作業も行っていくところに、カウンセリング室における進路支援の意義が認められる。

また、カウンセリング室で話すこと自体の自己決定促進効果が指摘できる。たとえば事例Aは、進路選択の基準に関して漠然とした希望は抱いていたものの、それがあいまいであるがゆえに、就職試験に対する不安を高めていたと思われる。したがって、Cl.の思いに即してその話題を明確化したことは、Cl.が安心感を持って就職試験に臨むための、心理面のサポートとして本質的であったと言える。また事例Dでは、ある業種に確信をもってこだわってきたが、その理由を掘り下げて聞くうちに、その確信が「ただなんとなくの決め付け」であったことが明らかになっていった。ここで重要なのは、他の業種もあためようとの結論を、Cl.が自発的に下したことであって、他者からの指導や強制によるものではないということである。これこそが、Cl.の生きる力を引き出していくカウンセリングの成果であるといえよう。

心理教育面に焦点を当てない通常の実践的就職指導では、当然のことではあるが「本人の希望」を指導の出発点とする場合が多いと思われる。しかし、それ以前の問題として、「本人の希望」自体を吟味する場が必要であるということが強く認識されてきており、実践的指導の前段階である基礎的指導のひとつとしてカウンセリング室が機能したことを指摘しておきたい。そして、このような支援の必要性は、事例Dの「決め付けずにもっと早い段階からいろいろな可能性を探ればよかった」と悔やむ言葉からも、痛切に伝わってくる。

本事例の限界としては、キャリア・カウンセリングの機能を重視するならば、現実的な会社情報や就職情報などが少ないことが指摘できる。もとより私どもは、狭義のキャリア・カウンセリングは専門としておらず、ただひたすら学生の必要性に迫られて効果的な援助を模索しはじめたところである。そこで、このような専門性の限界を補うためには、①より専門的な、就職課での実践的指導にうまく橋渡しし、連携を強めること、②個別面接にくわえて、構成的なグループ面接や授業形式でのキャリア・エデュケーションの機会を設定して、就職意識の育成を図ることなどが課題として残される。

〈研究2〉

【目的】

臨床事例を通して、学生が、自分自身についていろいろ考え模索してはいるものの、それが必ずしも効果的な進路選択につながってはいないのではないかと推測された。その理由として、以下の2点が事例を通して問題提起できる。

第一に、自分自身の進路について真剣かつ系統的に考え始める時期が遅いのではないかとということである。近年では就職活動の時期も実質的に早まっている。就職活動が始まってしまうと、なかなか自分をゆっくり見つめなおす時間は持ちにくく、見つめたとしても焦燥感が伴うために空回りしがちであると思われる。もちろ

ん、就職活動をしながら自分の適性や希望や能力を吟味する作業も大切であろう。しかしそれは、ある程度事前の吟味を基礎とした上で、それを現実とつきあわせて再吟味する過程であってこそ、より意義深いのではなからうか。

第二に、学生本人としては、自分では一生懸命考えて取り組んでいるつもりであっても、積極的に情報を集めたり現実的な学習面の準備を行うなどの、現実とのアクセスが乏しい傾向があるのではなからうか。研究1の事例Dのように、1つの目標を強く心に抱いている学生であっても、話を掘り下げていくと、案外現実的には事前の準備などに着手することなく、就職活動を展開している場合も見受けられる。

大学生のキャリア・ガイダンスに関しては、職業選択理論、状況的・社会的構造理論、心理学的構造理論、職業発達理論の各方面から、さまざまな研究が蓄積されている(木村, 1997)。近年わが国では特に、Banduraの自己効力理論を進路選択場面に応用した進路選択に対する自己効力感を扱った研究が多く見受けられる(安達, 2001)。しかし本稿では、本学における学生の進路意識や態度について、臨床的に浮かび上がってきた問題意識に即して実態把握し、それに基づいた効果的支援を提供することを主眼とするため、既成の標準化された尺度ではなく、問題意識に即した質問項目を用いて調査したいと考える。

【方法】

被験者：本学学生623名(1～4年生)、4月の健康診断実施日時に配布・回収(回収率68.8%)。平均年齢19.8才、SD=2.1。男女、学年の内訳は、表2のとおりである。

表2 調査対象内訳

	男 性	女 性	計
1年次	116	62	178 (28.6%)
2年次	68	67	135 (21.7%)
3年次	67	61	128 (20.5%)
4年次	85	97	182 (29.2%)
計	336 (53.9%)	287 (46.1%)	623 (100%)

質問紙：

I 「進路に対する意識・態度」

学生の進路に対する意識や行動に関して4件法でたずねた。具体的な質問内容も以下に記述する。

① 「進路に関する自己探索(以下、「自己探索」と略す)」

質問内容：今後の進路について、自分の希望や向き・不向きについてよく考える。

② 「進路に関する情報収集(以下、「情報収集」と略す)」

質問内容：進路に関する情報を積極的に集めている。

③ 「受験対策など勉強面の準備(以下、「勉強面の準備」と略す)」

質問内容：自分の目標に沿って、実際に勉強などの準備に打ち込んでいる。

④ 「友人との情報交換」

質問内容：友達と将来の進路についてしばしば話し合う。

⑤ 「就職への意志」

質問内容：ゆくゆくは、なんとしても仕事につきたい。

II 「セルフエスティーム」尺度

学生の全般的な心理的健康の指標として、Rosenbergのセルフエスティーム尺度(星野訳、井上1992より引用)の全10項目を4件法で実施した。

【結果】

I 「進路に対する意識・態度」の各項目の選択率は表3のとおりである。

表3 「進路に対する意識・態度」各項目の選択率

B-1	1年						2年						3年						4年						全学年						
	男	%	女	%	計	%	男	%	女	%	計	%	男	%	女	%	計	%	男	%	女	%	計	%	男	%	女	%	計	%	
自己探索	1	7	6.0	3	4.8	10	5.6	3	4.4	1	1.5	4	3.0	1	1.5	0	0.0	1	0.8	3	3.5	1	1.0	4	2.2	14	4.2	5	1.7	19	3.0
	2	17	14.7	10	16.1	27	15.2	10	14.7	7	10.4	17	12.6	13	19.4	7	11.5	20	15.6	6	7.1	2	2.1	8	4.4	46	13.7	26	9.1	72	11.6
	3	59	50.9	30	48.4	89	50.0	35	51.5	39	58.2	74	54.8	37	55.2	42	68.9	79	61.7	40	47.1	53	54.6	93	51.1	171	50.9	164	57.1	335	53.8
	4	33	28.4	19	30.6	52	29.2	18	26.5	20	29.9	38	28.1	16	23.9	12	19.7	28	21.9	35	41.2	41	42.3	76	41.8	102	30.4	92	32.1	194	31.1
	NA	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.9	0	0.0	2	1.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	1	0.5	3	0.9	0	0.0	3	0.5
	計	116	100	62	100	178	100	68	100	67	100	135	100	67	100	61	100	128	100	85	100	97	100	182	100	336	100	287	100	623	100
情報収集	1	16	13.8	12	19.4	28	15.7	12	17.6	6	9.0	18	13.3	10	14.9	11	18.0	21	16.4	8	9.4	2	2.1	10	5.5	46	13.7	31	10.8	77	12.4
	2	64	55.2	27	43.5	91	51.1	38	55.9	40	59.7	78	57.8	43	64.2	35	57.4	78	60.9	23	27.1	25	25.8	48	26.4	168	50.0	127	44.3	295	47.4
	3	28	24.1	20	32.3	48	27.0	14	20.6	19	28.4	33	24.4	11	16.4	11	18.0	22	17.2	36	42.4	56	57.7	92	50.5	89	26.5	106	36.9	195	31.3
	4	8	6.9	3	4.8	11	6.2	2	2.9	2	3.0	4	3.0	1	1.5	4	6.6	5	3.9	17	20.0	14	14.4	31	17.0	28	8.3	23	8.0	51	8.2
	NA	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.9	0	0.0	2	1.5	2	3.0	0	0.0	2	1.6	1	1.2	0	0.0	1	0.5	5	1.5	0	0.0	5	0.8
	計	116	100	62	100	178	100	68	100	67	100	135	100	67	100	61	100	128	100	85	100	97	100	182	100	336	100	287	100	623	100
勉強面の準備	1	14	12.1	12	19.4	26	14.6	20	29.4	10	14.9	30	22.2	11	16.4	12	19.7	23	18.0	7	8.2	6	6.2	13	7.1	52	15.5	40	13.9	92	14.8
	2	66	56.9	29	46.8	95	53.4	27	39.7	40	59.7	67	49.6	44	65.7	25	41.0	69	53.9	48	56.5	39	40.2	87	47.8	185	55.1	133	46.3	318	51.0
	3	26	22.4	16	25.8	42	23.6	16	23.5	14	20.9	30	22.2	10	14.9	18	29.5	28	21.9	21	24.7	46	47.4	67	36.8	73	21.7	94	32.8	167	26.8
	4	10	8.6	5	8.1	15	8.4	3	4.4	3	4.5	6	4.4	2	3.0	5	8.2	7	5.5	8	9.4	5	5.2	13	7.1	23	6.8	18	6.3	41	6.6
	NA	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.9	0	0.0	2	1.5	0	0.0	1	1.6	1	0.8	1	1.2	1	1.0	2	1.1	3	0.9	2	0.7	5	0.8
	計	116	100	62	100	178	100	68	100	67	100	135	100	67	100	61	100	128	100	85	100	97	100	182	100	336	100	287	100	623	100
友人との情報交換	1	15	12.9	6	9.7	21	11.8	9	13.2	5	7.5	14	10.4	4	6.0	2	3.3	6	4.7	7	8.2	6	6.2	13	7.1	35	10.4	19	6.6	54	8.7
	2	39	33.6	22	35.5	61	34.3	23	33.8	26	38.8	49	36.3	15	22.4	9	14.8	24	18.8	48	56.5	39	40.2	87	47.8	125	37.2	96	33.4	221	35.5
	3	50	43.1	26	41.9	76	42.7	28	41.2	30	44.8	58	43.0	38	56.7	38	62.3	76	59.4	21	24.7	46	47.4	67	36.8	137	40.8	140	48.8	277	44.5
	4	11	9.5	8	12.9	19	10.7	6	8.8	5	7.5	11	8.1	8	11.9	12	19.7	20	15.6	8	9.4	5	5.2	13	7.1	33	9.8	30	10.5	63	10.1
	NA	1	0.9	0	0.0	1	0.6	2	2.9	1	1.5	3	2.2	2	3.0	0	0.0	2	1.6	1	1.2	1	1.0	2	1.1	6	1.8	2	0.7	8	1.3
	計	116	100	62	100	178	100	68	100	67	100	135	100	67	100	61	100	128	100	85	100	97	100	182	100	336	100	287	100	623	100
就職への意志	1	2	1.7	2	3.2	4	2.2	3	4.4	2	3.0	5	3.7	2	3.0	3	4.9	5	3.9	5	5.9	1	1.0	6	3.3	12	3.6	8	2.8	20	3.2
	2	3	2.6	4	6.5	7	3.9	4	5.9	5	7.5	9	6.7	7	10.4	6	9.8	13	10.2	4	4.7	6	6.2	10	5.5	18	5.4	21	7.3	39	6.3
	3	32	27.6	25	40.3	57	32.0	25	36.8	25	37.3	50	37.0	21	31.3	15	24.6	36	28.1	25	29.4	31	32.0	56	30.8	103	30.7	96	33.4	199	31.9
	4	78	67.2	31	50.0	109	61.2	34	50.0	33	49.3	67	49.6	34	50.7	37	60.7	71	55.5	50	58.8	59	60.8	109	59.9	196	58.3	160	55.7	356	57.1
	NA	1	0.9	0	0.0	1	0.6	2	2.9	2	3.0	4	3.0	3	4.5	0	0.0	3	2.3	1	1.2	0	0.0	1	0.5	7	2.1	2	0.7	9	1.4
	計	116	100	62	100	178	100	68	100	67	100	135	100	67	100	61	100	128	100	85	100	97	100	182	100	336	100	287	100	623	100

各項目の得点を目的変数とし、学年及び性別を独立変数とした2要因の分散分析を行った。

①「自己探索」

得点の学年・性別分布を図1に、分散分析結果を表4に示す。学年の主効果が有意であった(1%水準)。さらに多重比較(Turkey法)によれば、推測されたとおり、4年に比べて、3年までの段階では、進路に関する自己探索・吟味に取り組みが少ないことが示された。

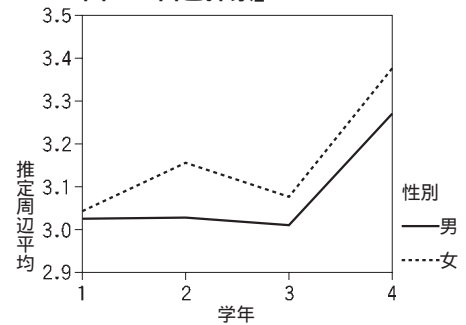
表4「自己探索」の分散分析

従属変数：V8

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	11.501 ^a	7	1.643	3.151	.003
Intercept	5773.496	1	5773.496	11072.329	.000
学年	9.508	3	3.169	6.078	.000
性別	1.065	1	1.065	2.042	.153
学年*性別	.230	3	7.663E-02	.147	.932
誤差	319.118	612	.521		
総和	6246.000	620			
修正総和	330.619	619			

a. R2乗=.035(調整済みR2乗=.024)

図1「自己探索」



②「情報収集」

得点の学年・性別分布を図2に、分散分析結果を表5に示す。学年及び性別の主効果が有意であった(1%水準)。さらに多重比較(Turkey法)によれば、やはり情報収集に関しても、4年に比べて、3年までの段階では、積極的な情報収集への取り組みが少ないことが示された。また男子に比べて女子の取り組みが熱心であることも示された。

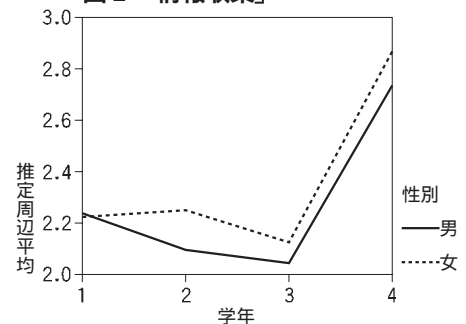
表5「情報収集」の分散分析

従属変数：V9

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	52.731 ^a	7	7.533	13.321	.000
Intercept	3169.867	1	3169.867	5605.472	.000
学年	50.092	3	16.697	29.527	.000
性別	1.059	1	1.059	1.873	.172
学年*性別	.631	3	.210	.372	.773
誤差	344.952	610	.565		
総和	3828.000	618			
修正総和	397.683	617			

a. R2乗=.133(調整済みR2乗=.123)

図2「情報収集」



③「勉強面の準備」

得点の学年・性別分布を図3に、分散分析結果を表6に示す。学年と性別の主効果が有意であった(1%水準)。さらに多重比較(Turkey法)によれば、やはり勉強面の実際の準備に関しても、4年に比べて、3年までの段階では、積極的な取り組みが少ないことが示された。また男子に比べて女子の取り組みが熱心であることも示された。

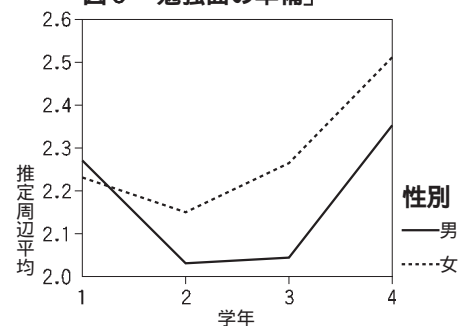
表6「勉強面の準備」の分散分析

従属変数：V10

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	14.8141 ^a	7	2.116	3.505	.001
Intercept	2936.911	1	2936.911	4864.270	.000
学年	10.939	3	3.646	6.039	.000
性別	1.059	1	1.899	3.146	.077
学年*性別	1.563	3	.521	.863	.460
誤差	368.301	610	.604		
総和	3523.000	618			
修正総和	383.115	617			

a. R2乗=.039(調整済みR2乗=.028)

図3「勉強面の準備」



④ 「友人との情報交換」

得点の学年・性別分布を図4に、分散分析結果を表7に示す。学年と性別の主効果が有意であった(1%水準)。さらに多重比較(Turkey法)によれば、友人との情報交換は、1～2年次に比べ、3年以降で増加することが示された。また男子に比べて女子の取り組みが多いことも示された。

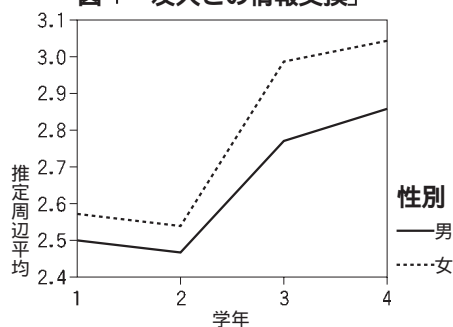
表7 「友人との情報交換」の分散分析

従属変数：V11

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	29.484 ^a	7	4.212	6.445	.000
Intercept	4326.299	1	4326.299	6619.560	.000
学年	24.244	3	8.081	12.365	.000
性別	2.713	1	2.713	4.151	.042
学年*性別	.590	3	.197	.301	.825
誤差	397.366	608	.654		
総和	4976.000	616			
修正総和	426.851	615			

a. R2乗=.069(調整済みR2乗=.058)

図4 「友人との情報交換」



⑤ 「就職への意志」

分散分析結果を表8に示す。学年及び性別の各要因において、主効果・交互作用ともに有意ではなかった。

表8 「就職への意志」の分散分析

従属変数：V12

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	5.745 ^a	7	.821	1.444	.185
Intercept	6872.830	1	6872.830	12097.184	.000
学年	1.812	3	.604	1.063	.364
性別	7.920E-02	1	7.920E-02	.139	.709
学年*性別	2.856	3	.952	1.675	.171
誤差	344.290	606	.568		
総和	7663.000	614			
修正総和	350.034	613			

a. R2乗=.016(調整済みR2乗=.005)

Ⅱ 「セルフエスティーム(表中ではSEと略す)尺度と「進路に対する意識・態度」各項目との相関を表9に示す。「進路に対する意識・態度」の項目①と⑤は、セルフエスティームとはそれぞれ無相関であったが、その他の項目に関しては、セルフエスティームと中程度の正の相関が得られた。

表9 SE尺度と進路に対する意識・態度との相関

	自己探索	情報収集	勉強面の準備	友人との情報交換	就職への意志
SE	0.016	0.234 **	0.248 **	0.247 **	0.057

** : 1%水準で有意(両側検定)

【考察】

I まず、「進路に対する意識・態度」の結果を総合すると、親しい非公式の友人間での情報交換が、3年次からすでにみられることから、学生の就職に対する意識自体は、たとえそれが漠然としたものであったとしても、3年次当初にすでに高まってきていると考えられる。しかしその一方で、それが心理的自己吟味や、現実的準備行動に結びつきにくいことが示された。これらの背景としては、学生なりに進路を真剣に考えたいと思うものの、その方策に関して糸口がつかめないでいることも関連しているのではないかと考えられ、ここに専門的支援の必要性が再認識された。4年で各項目得点がいっせいに高くなっているのは、現実に就職活動に突入して初めて、必要に迫られて着手せざるを得ない現状を反映していると言える。

昨今の就職活動をめぐる社会状況を考慮すると、どんなに遅くとも2年次から心理的自己吟味をとおして進路意識を形成し、また3年次においてはすでに現実的な準備に着手していることが望ましいと思われる。カウンセリングの観点からは、現在行っている個別的支援に加えて、学生全体を見据えた上で、①早い段階から進路に関する意識を全体的に高めていくような働きかけを行うこと、②グループ活動等を通して、非公式の親しい友人間の情報交換を超えた、より社会性の高い情報交換の場を提供していくこと。③各種心理検査等を活用して、進路に関する心理的自己吟味の深化をはかることなどが、今後の活動における課題であることが認識された。

さて、各要因において主効果・交互作用ともに認められなかった「就職への意志」項目は、裏返せば近年注目を集めている「職業不決断」あるいは「職業未決定」傾向を反映するといえる。これは、将来の職業について展望がもてず、何を志望するのかを自己決定しない、あるいは自己決定できない問題である(安達、2001)。進路に関する他の項目では、4年生になると必要に迫られておおむね得点が高くなっているのに対し、この項目においてのみ学年差が見られないということはすなわち、「職業不決断」あるいは「職業未決定」の心理が、現実状況には直接的に影響を受けにくい比較的安定した個人差の問題であることを示しており、より重い心理発達上のつまづきと関連していることを示唆している。これについては、治療的カウンセリングの適応でもあることから、今後更なる検討が課題である。

II セルフエスティームとの関連については、心理的自己吟味を示す項目との相関がみられなかったことから、自己の職業的興味や関心について系統的に検討を加える作業は、たとえ精神的に健康で安定している学生であっても自発的には行いにくい作業であることが指摘できる。すなわち、この領域に関しては、全学生を視野に入れて、心理学的見地からの専門的な援助を展開する必要性が示された。

また、「進路に対する意識・態度」項目のうち、現実的な準備行動に関する項目と、セルフエスティーム得点との正の相関が認められた。このことから、精神的健康度の比較的高い学生であれば、少なくとも時期が来て必要に迫られれば、いわばほうっておいても自発的に実際の準備行動に着手することが示唆された。逆にいえば、必要に迫られても準備行動に着手できない学生群の存在が一方で示されたわけであり、このような一部の学生に対する、心理的安定や発達促進的サポートにはじまり、現実的実際的手続きへの橋渡しにいたるまでのきめ細かな心理教育的援助が必要であることが示された。

以上を総合すれば、①全学生に対する心理学的自己吟味の促進的援助と、②一部の学生に対する、個々の必要に応じた、治療的および社会適応促進的援助が必要であることが明らかになった。

一方、職業不決断あるいは職業未決定項目がセルフエスティーム得点と無相関であったことは、やや意外ともいえる結果であった。セルフエスティームは自己評価の全般的な高低を示すものであるから、自己評価が高ければより社会にも目が向きやすいと考えられるからである。ひとつには質問項目作成上の問題点があったと思われる。職業不決断あるいは未決定の問題は、本学カウンセリング室でも時折中心的テーマとなる問題であるため、今後はより一層精度の高い方法を用いた検討が課題と言える。

【まとめ】

本学学生の進路をめぐる問題について、事例研究と調査研究をもとに検討した。事例研究からは、従来のカウンセリングの立場からの支援が、そのまま進路決定や就職活動といった学生の現実適応に関しても、一定の心理教育的機能を果たしていることが確認された。

さらに調査研究の結果、①3年の4月の段階では、進路に関する意識や態度が漠然とは高まっているものの、明確には育成されておらず、それに対する支援が必要なこと、②進路をめぐる心理的自己検討については、精神的健康度に関係なく、全学生を対象とした構成的グループ活動や授業形式などのキャリア・エデュケーションが求められること、③情報収集や勉強面の準備など現実的かつ実際の就職活動への着手に関しては、精神的健康との関連が示唆されるため、これについては一部の学生に対する、個人のニーズに即したよりきめこま

やかな支援が求められていること、④進路に対する未決断傾向に、学年差はなく、個人差に即したものであることが示唆された。つまり、周りの状況がどれほど就職に向けて活発化しても、それにあまり影響を受けない未決断傾向の者がいるということである。この点は本学において少数ではあるが深刻な問題といえるので、今後、より緻密な調査研究が課題である。

【引用文献】

安達智子 2001 進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について 女子短大生を対象とした検討 心理学研究 72-1 p10-18

木村 周 1997 キャリア・カウンセリング 理論と実際、その今日的意義 社団法人雇用問題研究会

井上祥治 1992 セルフエスティームの測定法とその応用(セルフエスティームの心理学 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋編)ナカニシヤ出版p34